



**Data**

監督・脚本：白雪（パイ・シュエ）  
 エグゼクティブ・プロデューサー：  
 田壮壮（ティエン・チュアン  
 チュアン）  
 出演：黄堯（ホアン・ヤオ）／孫陽  
 （スン・ヤン）／湯加文（カ  
 ルメン・タン）／倪虹潔（ニ  
 ー・ホンジエ）／江美儀（エ  
 レン・ゴン）／廖啓智（リウ・  
 カイチー）／焦剛（チアオ・  
 ガン）

## 👁️👁️ みどころ

2020年6月に制定・施行された「香港国家安全維持法」によって、それまで続いていた「一国二制度」は崩壊！？しかし、白雪（パイ・シュエ）監督はそれとは異なる「THE CROSSING」の視点から、深圳と香港を跨いでスマホの密輸団に加担していく女子高生ペイの姿を鮮やかに切り取った。

ペイは越境児童だが、それってナニ？深圳と香港の往来には、なぜ出入国審査（イミグレーション）や税関があるの？そもそも、一国二制度とはナニ？それらをしっかり勉強しながら、16歳の少女、ペイの生きざまを確認したい。

ちなみに、ペイが親友のジョーと共に夢みた旅行先はどこ？それを当てることができれば、あなたはかなりの中国通だが・・・。

### ■□■ペイは越境児童！なぜ深圳と香港を毎日、越境通学？■□■

北京電影学院を2007年に卒業した白雪（パイ・シュエ）監督の初長編作品たる本作の主人公、16歳の女子高生ペイ（黄堯（ホアン・ヤオ））は、深圳で母親ラン（ニー・ホンジエ）と暮らしながら、香港の高校に通う“越境児童”（中国語では“跨境学童”）。ペイの父親は、香港でれっきとした家庭を持ち、トラック運転手の仕事をしているヨン（リウ・カイチー）。しかし、ペイはその家庭で生まれた娘ではなく、ヨンと深圳の愛人だったランとの間に生まれた子供。つまり、父親が香港人で、母親が大陸人であり、両親の片方が香港永住権を持つ「単非児童」だ。その詳細は、パンフレットにある谷垣真理子（東京大学教授）のコラム「越境児童とふたつの都市の物語」を参照。

両者の家庭にどのようないざこざがあったのかは知る由もないが、当然いろいろあったはず。そんな環境下で育ち、今は思春期真っ盛りであるペイが、一緒に生活している母親ランに対して何かと反抗的なのは当然だ。他方、父親の職場を訪問した時にお小遣いをも

らえるのは嬉しいが、別の家庭で幸せそうに食事をしている父親を見ると・・・。

6歳の時に、両親と共に北方から南の深圳に渡って暮らし始めたバイ・シュエ監督は、隣接する香港の文化の影響を受けて育った。そのため、深圳と香港を行き来する時にイミグレーション（出入国審査）を通過する児童をよく見かけており、当初越境通学児童という特殊な集団をテーマに物語が作れないかと考え、2015年から2年間もの歳月をかけて取材を始め、2017年に完成した脚本をもとに2018年に制作したのが本作だ。

香港の「一国二制度」は、2020年6月の「香港国家安全維持法」の制定・施行によって崩壊してしまった感が強いが、越境通学児童というテーマを描いた本作は必見！

## ■□■女子高生の友情は？二人の夢は？■□■

JKと略称される女子高生の「生態」はいろいろと興味深いのが、本作導入部に見るペイと、その親友ジョー（湯加文（カルメン・タン））の友情はいかにもそれらしい。父親にも母親にも懐けず、兄弟もいないペイにとって、唯一の心のよりどころは親友ジョーと過ごす時間らしい。そんな2人の夢は「日本の北海道への旅行」というのが面白いが、その理由の第1は、雪を見て触って感じてみたいこと、第2は日本酒を飲みたいことだから、さらに面白い。

2人だけの時間でそんな夢を語り合っているところを見ると、いかにも無邪気なJKだが、そのために必要なのはお金。ペイと違って、香港に住み香港の学校に通う生粋の香港人たるジョーは富裕層に属していたから、それなりに豪華な家に住んでいる。さらに、ジョーのおばさんは、狭くて地価の高い香港でプール付きの大邸宅に住んでいるから凄い。そんなジョーにとっては北海道行きの旅費はちょろいものだが、ペイは北海道旅行のお金を貯めるために必死。そのため、今日も学校の同級生にスマホケースを売ったり、夜はレストランでバイトしたりして稼いでいた。しかし、香港と深圳を行き来するには、その度にイミグレーションと税関を通過しなければならないが、一国二制度の下では、密輸も・・・。

## ■□■「iPhone6」の“密輸”の稼ぎは？密輸団の存在は？■□■

深圳と香港は隣接している都市。しかし、前者は中国（中華人民共和国）で、後者は香港（特別行政区）だから、「一国二制度」という特殊な制度の下での深圳と香港の往来にはIDやビザが必要だし、税関もある。そのことは、私も香港から深圳に移動したときに体験済み。そんな中で浮上するのが、両都市の商品の価格の違いとそれを利用した密輸団の存在だ。深圳と香港はメチャ近いが、いくら距離が近くても、その往来にはイミグレーションと税関を通過することが必要。しかし、イミグレーションと税関さえ通過すれば、モノの持ち運びは簡単。すると、そこでは密輸が頻繁に・・・？

禁制品の密輸がバレれば大ごとだが、スマホ程度なら、バレても大した処分はなし・・・？かどうかは知らないが、制服姿で毎日イミグレーションと税関を通過しているペイに対して、突然ぶつかってきた若い男がとっさに手渡してきたのは、密輸団の一員として違法に持ち込んでいたそのスマホらしい。わけのわからないまま、若い男・メガネ（眼鏡仔）に

それを引き渡すと、それ相応の「分け前」をもらうことができたから、以降ペイが彼ら（密輸団）に接触していったのは仕方ない。だって、これをやれば、レストランのバイトとは比べ物にならない金を稼ぐことができるのだから。

深圳側の受け手であるシュエイ（焦剛（チアオ・ガン））はちょっと怖い中年男だったが、香港側の密輸グループの女ボス・ホア（江美儀（エレン・コン））は、ペイに自分の若い頃の面影を見て気に入り、利発さと気の強さを見込んでペイにいろいろと責任ある仕事を任せてくれたから、ペイの張り切りようも半端ではない。ジョーの彼氏である20歳のハオ（スン・ヤン）も、普段は家族が経営する小さな屋台を手伝いながら、ホアの手下として着実に仕事をこなしていたが、日々ペイと一緒に仕事をする中で次第に親しくなっていくと・・・？

### ■□■拳銃の密輸は？密輸団からの独立は？2人の友情は？■□■

中年のエロおやじがはびこる社会の中で、JKは何かと危険だが、制服を着た真面目そうなJKなら、税関を通過するのに怪しまれることは少ない。ホア率いる密輸団の手下であるチーザイ（七仔）やメガネが、それに気が付いた後、チンピラ風から制服の高校生に変身していくストーリーはユーモア感がタップリだ。

しかし、いくら稼げるからと言って、スマホから拳銃に密輸のターゲットを変えるのは如何なもの？父親が経営する屋台を手伝っているハオは慎重派（？）だからそれに躊躇したが、ホアが見込んだ通りの“良い根性”をしているペイは、悩みながらもそれをオクケーしたからちょっとヤバイ。さらに、そんな仕事上の悩みを共有し、共に過ごす時間が長くなっていくと、ジョーの恋人であったはずのハオとペイの親密性が増していったのも仕方ない。ジェニファー・ジョーンズとウィリアム・ホールデンが共演した名作『慕情』（55年）では、ヒロインが勤務する病院の裏にある、香港を一望できる丘が二人の思い出の場所になっていた。しかし、本作もそれと同じように、ハオがいつも一人で登っている、香港を一望できる丘に初めてペイを連れて登るシークエンスが登場するが、ハオがわざわざペイをそこに連れて行ったことが意味するものは・・・？

ハオは拳銃の密輸に参加することには慎重だったが、慎重でなかったのはホア率いる密輸団からの独立。それは相当ヤバイことだが、ホアから独立してペイと2人だけでスマホを密輸し、2人だけで大儲けしようと計画したハオとそれに同意したペイ、2人の行動は？そして、そんな展開の中、近時ハオと自分との接点が少なくなったと感じていたジョーが、いつの間にかハオとペイがそんな風になっていることを伝え聞くと・・・。

JK同士の友情は深いようで浅い。一部ではそんな声も聴くが、そんな状況が明らかになった後の2人の友情は・・・？

### ■□■原題は？英題『THE CROSSING』の狙いは？邦題は？■□■

本作の原題は『过春天』で、直訳すれば「春を過ぎる」という意味だが、なぜ本作はそんな原題に？イントロダクションによれば、「过春天」は香港と深圳間の密輸団の隠語であ

り、密輸する人が無事税関を通り抜けた時に仲間に「過春天」と伝えるらしい。かつて、赤穂浪士が吉良邸に討ち入りする際、仲間内で斬り合わないために使った“合言葉”が「山と川」だったが、「過春天」はそれと同じような、密輸団の“合言葉”だ。

それに対し、英題は『THE CROSSING』。これは、イギリスが勝手につけた英題ではなく、白雪監督が自らつけたものだ。そして、パンフレットにある白雪監督インタビューでは「映画の英題名は『THE CROSSING』です。このタイトルに何か表現したい特別な意味はありますか？」という質問に対し、「『THE CROSSING』というのは実は行動的な感覚です。私の頭の中で、ペイはいつも走っているイメージです。だから、『THE CROSSING』にも中国語の「春を過ぎる」の面にもある種の動きがあります。」と答えている。なるほど、それも一理あるが、『THE CROSSING』という邦題を聞いて私がすぐに思い出す映画は、呉宇森（ジョン・ウー）監督の大作『The Crossingーザ・クロッシングーPart I（太平輪 乱世浮生（前編／The Crossing）』（14年）（『シネマ 44』78頁）と『The Crossingーザ・クロッシングーPart II（太平輪 彼岸（後編／The Crossing 2）』（15年）（『シネマ 44』90頁）。同作が『The Crossingーザ・クロッシングー』とタイトルされた理由は、同作が中国大陸の上海と台湾の基隆市を結ぶ「中国のタイタニック」と呼ばれた大型客船「太平輪号」を軸とした「歴史ドラマ」・「人間ドラマ」だったからだ。したがって、その『The Crossingーザ・クロッシングー』の狙いと、本作の『THE CROSSING』の狙いは全然違うものだというのを、しっかり認識したい。

また、「The Crossing」と聞けば、距離的に遠く隔てているイメージだが、本作の『THE CROSSING』は深圳と香港間だから極めて近距離。しかし、そんな近距離にもかかわらず、中国大陸にある深圳と特別自治区である香港は、「一国二制度」の下で大違いだから、その両都市を「THE CROSSING」するについては、本作のようなさまざまな問題点が・・・。

その両者に対して、本作の邦題は『THE CROSSING～香港と大陸をまたぐ少女～』だが、この説明方ぶりはいかにも今風。ここまでタイトルに入れれば確かに映画のイメージはよくわかるが、その是非は・・・？

## ■□■久しぶりに田壮壮の名前を！■□■

私が本作で注目したのは、エグゼクティブ・プロデューサーとして田壮壮の名前が載っていたこと。中国第五世代監督として、張芸謀（チャン・イーモウ）、陳凱歌（チェン・カイコー）（再開された北京電影学院の第1期の同期生）と並ぶ、彼の代表作は、『盜馬賊』（85年）（『シネマ 5』67頁）と、『青い罌』（93年）（『シネマ 5』98頁）だが、『青い罌』は中国当局の批判を受け、10年間映画製作を禁止された。また、彼の両親は共に文化大革命の迫害を受け、自身も下放された経験を持っている。後述の映画観は、そんな彼なればこそそのものだ。ちなみに、私は2007年10月10日に北京電影学院で特別講義をしたが、その打ち合わせの時に偶然出会ったのが、田壮壮氏。その時に2人並んで撮った記念写真は私の宝物だ（『シネマ 34』36頁）。

それはそれとして、本作についてバイ・シュエ監督は、田壮壮の手助けについて、「私の中の映画観と人生観は監督の影響をととても大きく受けています。この映画を作る前は、先生はいつも私に「自分で決めろ」と言ってきました。初めは理解できなかったのですが、あとになってそれが先生の考えだとわかりました。私に自分で判断できるようになって欲しかったのです」と語っている。逆に、田壮壮は「バイ・シュエ監督はとてもプロフェッショナルで彼女のスタッフもプロフェッショナルです。なので、私が撮影現場で何かすることは必要ないと考えました。今回のチームはとても団結力があり、とても専門的な経験が豊富です。その中でバイ・シュエ監督は創造的なリーダーシップ能力の点で監督が持つべき資質も持っていることを表していると思います」と語っている。

さらに私が注目したのは、「ティエン・チュアンチュアン氏は多くの映画でエグゼクティブプロデューサーを務めてこられました。本作はどういった点を意識しましたか？」という質問に対して彼が、「心のままに従って創作するか、映画市場に従って創作するかだと思います。その選択が重要です。監督は一定のレベルに行くと言行収入で考えるようになりますが、最初の映画作品は映画自体で考えるのではないのでしょうか？これは2つの考え方です。現在、新しい風潮と新人主義がありますが、それは興行収入とは関係なく、映画市場の問題だと思います」と語っていること。そしてさらに、『**『薬の神じゃない！』**』と『**THE CROSSING～香港と大陸をまたぐ少女～**』の監督はどちらも私の生徒の作品です。2作品とも非常によくできています。『**THE CROSSING～香港と大陸をまたぐ少女～**』には映画市場要素がありますが、これらの要素のために作られた作品ではありません。』と語っていることだ。

私はたまたま『**薬の神じゃない！**』(17年) (『シネマ 47』207頁) と本作を同じ時期に観たが、両者とも彼の生徒の作品であることを知り、「なるほど」と納得！

2020 (令和2) 年11月25日記